

都々逸に「夢に見るよじや 惚れよが薄い 真に惚れたら眠られぬ」と唄われる。私もこれほど佛を愛してみたい、佛にも愛されたい。佛に抱かれて、眠ってみたい。伴りの無い、その懷で、極樂・極樂と囁いてみたい。諸行無常を忘れてみたい。みたい、見たいと、夢うつつ、叶うことの無い現実が、我が欲望なり。我々の生活の中で問題視されるのが、大いなる欲望です。しかしながら、我々は欲望ばかりではなく、怒り・そねみ・妬み・愛憎・等々心を起因とする現象に苛まれながら、日々暮らしている理由です。懺悔文の中に「貪・瞋・癡」が悩みを作る「三毒素」であると、生臭い人間であっても、心は存在します。聖人と言われる方でも生きてる限り心の葛藤は消せないと思います。表面に出ない心も存在します。ドストエフスキーの小説「罪と罰」殺人の懺悔の形も色々あろう。許される殺人を戦と言うなれば、心が引き起こす殺人も許されよう。だが大義名分で片付けられる問題では無い。懺悔するとは**反省する事**にあると思います。反省で済む範囲内で事が終われば良しとした。私は何事も心が脳に司令を出すと考えています。修行は心を修める、心を清くする事にあると思います。身の潔白、即ち、真つ白で汚れない状態を指します。例えば酒を頂く。酒は般若湯と言つて、知恵袋にも成るらしい、又、百薬の長、薬にも成るらしい、しかし、度を過ぎると、酒乱になり、他に迷惑を掛けることに成ります。酒乱、要するに乱れなければ、良いかといえば、乱れる人は、すでに、酩酊状態にあるため、自意識も存在しなくなっているのです。現在はコロナウイルス感染症が夜の町から再び広がりを見せているようです。酒を飲んで気分の良いのは一瞬です。楽しんだ後にコロナではたまりません。程々が丁度良いようです。昭憲皇太后は「春の花 秋の紅葉のさかずきもほどほどに くままほしけれ」と詠によまれました。心・心・我が善心よ、悪心に負けてくれるな。佛よ、悪の呪縛から解き放し給えと。

友達が悪い、親が悪い、先生が悪い、政治が悪い、果ては社会が悪い、自分だけは良いはずなのに、こんなはずは無いと思ひ込む、廻りの人で自分の欲望を満たしていれば、氣に入らない、妬みが頭を持ち上げる。全てが自分の思い通りに成る事など無いのである。やがて自分だけが不運だと思ひこむように成り。ますますドツボにハマって逝きます。そんな人は、せつかくの出会いも自分から不運に導いてしまうのではなからうか。すべからず精神的病氣なのです。病は氣からと申すとおりです。決して楽家が良いと言う事では有りません。この世の**基本は生かされて、生きる。共に生きて生ける事が肝心です**。自分が主と思ひがちですが、従です。仕事・命を含め、全てが与えられているのです。最後は借りた身を彌陀の元に返さなくては成らないのです。綺麗な汚れの無い体にして返すのが礼儀でしょう。最後に引き取り手があるのは安心であり、この上ない幸せである。

八月は先祖に感謝の月です。気持ちを込めて供養しましょう。

令和二年八月一日

善壽界善入院油掛地藏尊